

 <p>Zambia</p>	学校名：杉並区立阿佐ヶ谷中学校	● 実践教科等：社会科
	氏名：本間 水月	● 時間数：7時間
	[担当教科：社会科]	● 対象生徒：第2学年
		● 対象人数：35人

## 1 単元名 日本の様々な地域 ～身近な地域の調査～

### 2 単元の目標

#### ESD の視点に立った学習指導で重視する能力・態度(国立教育政策研究所が例として示したもの)

- 身近な地域における諸事象を取り上げ、観察や調査などの活動を行い、生徒が生活している土地に対する理解と関心を深めて地域の課題を見出し、地域社会の形成に参画しその発展に努力しようとする態度を養う。(①批判的に考える力、⑦進んで参加する態度)
- 市町村規模の地域の調査を行う際の視点や方法、地理的なまとめ方や発表の方法の基礎を身につける。(③多面的、総合的に考える力)

以上 cf.「(2)日本の様々な地域 エ.身近な地域の調査」学習指導要領解説 p.56

- 身近な地域における諸事象と、発展途上国をはじめとする世界で起きている諸事象について、相違点だけでなく共通点も探し、身近な地域と世界規模の課題を見出し、それらを主体的に解決していこうとする態度を養う。(③多面的、総合的に考える力、⑥つながりを尊重する態度)

### 3 資質・能力育成に向けた授業づくりの視点(国立教育政策研究所・2014)

- |                         |                          |
|-------------------------|--------------------------|
| 1 意味のある問いや課題で学びの文脈を造る   | 2 子供の多様な考えを引き出す          |
| 3 考えを深めるために対話のある活動を導入する | 4 考えるための教材を見極めて提供する      |
| 5 すべ・手立ては活動に埋め込むなど工夫する  | 6 子供が学び方を振り返り自覚する機会を提供する |
| 7 互いの考えを認め合い学び合う文化を創る   |                          |

### 4 単元の指導について

#### (1)教材観

##### ●本単元のねらい

生徒が生活している杉並区において、自分なりの視点から杉並区の特色や課題点を取り上げ、観察や調査などの活動を行い、生活圏に対する理解と関心を深めさせたい。また、「自分にできること」「行政(杉並区/東京都/国)ができること」「その他企業や団体ができること」の観点から課題の解決方法を考察し、地域社会の形成に参画しその発展に努力しようとする態度を養いたい。

中央教育審議会答申(平成28年12月)「5. 現代的な諸課題に対応して求められる資質・能力」においては、次のように述べられている。

世界とそこにおける我が国を広く相互的な視野で捉えながら、社会の中で自ら問題を発見し解決していくことができるようになることも重要となる。国際的に共有されている持続可能な開発目標(SDGs)なども踏まえつつ、自然環境や資源の有限性、貧困、イノベーションなど、地域や地球規模の諸課題について、子供一人一人が自らの課題として考え、持続可能な社会づくりにつなげていく力をはぐくんでいくことが求められている。

本単元の後半では、杉並区の特色や課題を捉える際に用いたSDGsを、「開発途上国」の一つに数えられるザンビアの特色や課題を捉える際にも用い、相違点だけでなく共通点なども考えさせたり、「開発途上国」と日本との関係を、相互依存の関係からとらえ直したりすることにより、持続可能な社会づくりに向けて生徒の主体的な態度を養うことをねらいとしたものである。

##### ●既習内容

小学校第3学年社会科の「地域学習」では、地元の商店への訪問や家庭での買い物について調査を行っており、統計に基づいた考察や生徒同士の話し合いなどの学習を行っている。中学校2年生では主に次の内容を新たな課題として取り上げる。

- ・国際連合で採択された「SDGs」の「17のゴール」ヒントに、杉並区の特色や課題点を見出す。
- ・「主体的・対話的で深い学び」に立脚し、調査内容をもとに生徒同士の考察によって、課題をより深化させ、解決していこうとする態度を養うという、深い学びを目指したものである。
- ・「日本の様々な地域」の大項目は、「世界の様々な地域」の学習成果を踏まえ、日本及び日本の諸地域の地域的特色をとらえていくことにある。昨年度の学習成果を踏まえ、「SDGs」をツールと

して世界の諸問題と関連させ、地域課題を捉え直していく。

また、本単元は公民的分野での「私たちと国際社会の諸課題」に接続するものである。

(2) 生徒観

- ・1 学年次に地理的分野「世界の諸地域」を学ぶ際、一貫して諸地域の特徴や課題点を生徒が自らの視点で記録した。この学習記録を踏まえ、学年行事「弁論大会」とタイアップして世界で起きている諸問題について取り上げ、レポートを作成、製本、発表を行った。2 年次でも日本や世界で起きている諸問題等について記録を続けており、昨年度と同じくレポート作成、製本、弁論大会での発表を企画しており、同内容は3 年次でも継続する予定である。
- ・夏季休業中課題「SDGs × すぎなみ～私の視点～」では、ほとんどの生徒が SDGs ツールとして杉並区の特徴や諸課題について自分なりの視点から調査、課題解決方法を提案することができた。またレポート発表や班の協議を通して、多面的・多角的に特色や課題を捉えることができた。

(3) 指導観

- ・個人発表、個人発表を踏まえた振り返り、代表発表、代表発表を踏まえた振り返り(協議)など、段階を踏まえて対話と協同を取り入れた学習を行っていく。
- ・自己の考え方や課題に対する視点の変容に気づかせるため、1 つのワークシートに学習前後の考えを書かせる。(1 枚ポートフォリオ)また、ワークシートに書く内容の主題や書き出しの例を載せ、様々な視点から考察できるようにしておく。

5 評価規準

観点	関心・意欲・態度	思考・判断・表現	技能	知識・理解
評価規準	身近な地域の特色や課題を追究するとともに、課題の解決策を意欲的に考えようとする。	身近な地域の地域的特色や課題をとらえるために適切な地理的事象を取り上げ、それらを多面的・多角的に調査し考察している。	地図や景観写真、統計資料などを的確に読み取って活用するとともに、調査結果もわかりやすくまとめ、表現することができる。	身近な地域の特色を理解するとともに、調査の視点や方法を身につけている。
評価方法	・レポート ・班活動の態度 ・ワークシート	・ワークシート ・班活動の態度	・レポート	・レポート ・ワークシート

6 単元の構成

時限	小単元名	学習のねらい	授業内容
1	●テーマ探し	身近な地域における諸事象を多面的、多角的に取り上げる。	・ウェブマップ作製(6 人班) ・個人ウェブマップ作製 ・テーマ・調査方法計画
時間外	●個人テーマ決め、個別指導	身近な地域における諸事象を自分なりの視点から取り上げ、調査について適切な方法を考える。	・テーマの絞り込みについて指導 ・使用資料や注意点等指導 ・調査方法・内容等指導
時間外	●夏季休業中課題「SDGs × すぎなみ～私の視点～」	・資料等を的確に読み取り活用する。調査結果をわかりやすくまとめ、表現する。	・調査(インタビュー、資料、現地取材等) ・レポート作成
2・3	●発表会・検討会	・身近な地域の特色や課題を追究するとともに、課題の解決策を意欲的に考えようとする。	・レポート個人発表(グループ内)
4	●代表者発表会・まとめ		・代表者発表(2 名) ・班ごとに協議・まとめ(班の協議内容発表) ・まとめ(個人発表・代表者発表、班での協議・発表を通して考えたこと)
時間外	●アンケート実施	・学習後の自己変容に気づき、学習内容を深化させる。	・アフリカ州、ザンビアに対するイメージ ・国際協力はなぜ必要か? ※一枚ポートフォリオ(1/3)
5	●SDGs × ザンビ	・SDGs ツールとして、杉	・「国際協力はなぜ必要か？」相互の意見

JICA 教師海外研修 授業実践報告書

	ア～私の視点～	並区とザンビアの特色や課題点の相違点や共通点に気づく	・ザンビア概要 ・「気になる1枚」×SDGs ・ザンビアはどんな国になっていくと思うか
6	●ザンビアにおける国際協力	・国際協力の具体例を知り、国際協力の必要性についての学習を深化させる。	・ザンビアはどんな国になっていくと思うか ・ザンビアにおける国際協力の紹介 ・国際協力について考えたこと ※「国際協力はなぜ必要か」(2/3)
7	●10円玉とザンビア	・「相互依存神経衰弱」、日本の10円玉の事例などから、私たちの生活と発展途上国の暮らしのつながりを考える。	・「相互依存神経衰弱」 ・まとめ(SDGsを通して考えたこと) ①杉並区とザンビアの相違点・共通点 ②国際協力について考えたこと ※「国際協力はなぜ必要か」(3/3)
時間外	●弁論大会テーマ決め	・SDGsNo.11「住み続けられるまちづくりを」を共通テーマとして具体的な取り組みについて考え、行動しようとする態度を育成する。	・「誰も取り残さない～Leave No One Behind～住み続けられる世界(まち)づくりのために」テーマ決めワークシート
時間外	●「SDGs×すぎなみ～私の視点～」冊子作製、配布	・身近な地域や国際的な諸問題について多面的・多角的な視点から課題を見直す視点を身につけ、課題を解決しようとする態度を身につける。	冊子内容…①レポート「SDGs×すぎなみ～私の視点～」、②単元【7】まとめ
総合	●レポート作成 ●弁論大会		「誰も取り残さない～Leave No One Behind～住み続けられる世界(まち)づくりのために」

7 授業事例の紹介

小単元名【 10円玉とザンビア 】

(1) 指導案

(ア)実施日時 10月13日(金)第6限

(イ)実施会場 2年A組教室

(ウ)本時の目標

- ・私たちの生活と発展途上国の暮らしのつながりを考える

(エ)指導のポイント

- ・「相互依存神経衰弱」、日本の10円玉の具体的な事例等から、私たちの生活と発展途上国の暮らしのつながりを考える。
- ・「誰も取り残さない～leave no one behind 住み続けられる世界づくり～」を単元終了後の共通テーマとすることで、世界と地域の相違点や共通点、世界と自分の生活を結ぶ視点の獲得や、課題解決のための具体的な方法について、考え行動しようとする姿勢を育てる。

(オ)本時の展開

過程・時間	指導内容	学習活動	指導形態	指導上の留意点	評価 (評価規準・評価)
5分	●携帯電話と発展途上国	・携帯電話に使用されている希少金属の種類と、主な産出地を知る。	講義		◆思考・判断・表現(ワークシート)
30分	●相互依存	・「相互依存神経衰弱」に取り組み、モノカルチャー経済を支えている相互依存の構造に気づく。 ・モノカルチャー経済による弊害について学習をする。 ・「ザンビアの銅と10円玉」、「マレーシアの熱帯林の伐採と国立競技場」など、私たちの生活と発展途上国の密接なつながりについて考える。	グループ活動 講義	・モノカルチャー経済の弊害については、①「小さな赤いめんどりの話」、②南アフリカ共和国産の商品が並ぶスーパーの話、③地図帳の統計資料④前時の写真などをもとに説明する。	◆思考・判断・表現(ワークシート)  ◆関心・意欲・態度(ワークシート)

10分	●個人のまとめ	・SDGsをツールとして考えたことをまとめる。 ①杉並区とザンビアの相違点・共通点、②国際協力について考えたこと	個人	・事前課題「国際協力はなぜ必要か」のワークシートに続けて書かせ、考えの深化や変化に気づかせる(一枚ポータル)	
5分	●今後の探求テーマ決め	・「誰も取り残さない～leave no one behind～住み続けられる世界づくりのために」テーマ決め	個人	まとめでは行動内容の具体例を書かせることを中心課題とし、今後、冊子にした際等に共有することで、考察を深化させ次の課題を見つけさせる。	◆関心・意欲・態度(ワークシート)

(2) 授業の振り返り

- ・多くの生徒が目まぐるしい展開に関わらず、意欲的に参加していた。導入における「使用済みの携帯電話の行く末」「東京オリンピックのメダルの原料」などの話で生徒の経験などをもとにしたり、スライド中「造幣局に問い合わせしてみた。」の部分では実際に送ったメール文と合わせて紹介したため、生徒の関心を引き付けることができたと考えられる。
- ・「相互依存神経衰弱」では、学習の中で生徒自身が様々な気づきを得ていた。ワークシートを配布する際「わかったこと」だけでなく「考察」までいきつけるように時間配分に工夫が必要であった。
- ・学習のまとめにおいて、「杉並区(日本)とザンビアの異なる点と共通点」を考えた。共通点について、「自然が減少している」の他、「問題がたくさんある」、「何かに頼らないと生活できないこと」等と、SDGsを学習ツールとした結果得られたと考えられるもの、相互依存関係への気づきなどが挙げられた。

(3) 使用教材

- ・夏季休業中課題『SDGs×すぎなみ～私の視点～』テーマ探しに際して、Web マップを作製

「杉並区」を中心として班ごとに①杉並にあるもの、②考えられる課題点を、段階的に書き出した。全ての班のマップを廊下に掲示した後、個人テーマの設定を行った。この間に SDGsの説明を、外務省作成のピコ太郎氏の動画と合わせて行った。



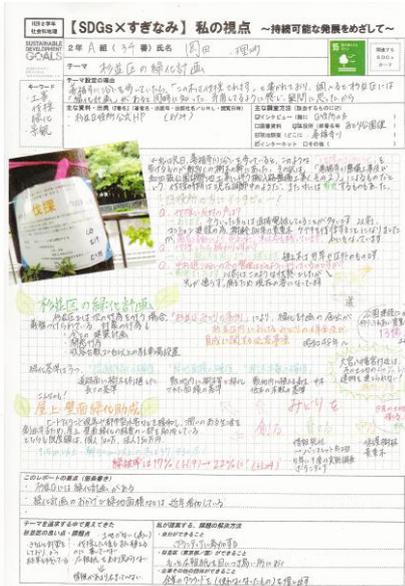
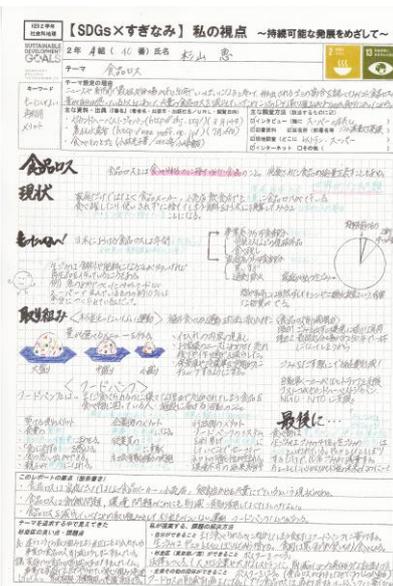
- ・学校栄養士インタビュー(レポート課題で「食品ロス」「SDGs No.2 飢餓をゼロに」を選んだ生徒のみ)



インタビューは「食品ロス」だけでなく、給食費の問題、食の安全、国産品の使用について、食育、地産地消、フードマイレージ、労働時間、等の問題について考えさせられる内容になり、テーマを変更した生徒もいた。給食では「食品ロス」が話題となり、「残飯ゼロ」を目指す動きも見られた。

- ・夏季休業中課題『SDGs×すぎなみ～私の視点～』レポート(生徒作品)

レポートに必須の記入内容…①テーマ、②関連するSDGsカード、③テーマ設定の理由、④主な資料、⑤主な調査方法、⑥キーワード、⑦レポートの要点(3点箇条書き)、⑧テーマを追求する中で見えてきた杉並区の特徴・課題点、⑨私が提案する課題解決方法(A:自分ができるところ、B:杉並区(東京都/国)ができること、C:企業その他の団体ができるところ)



- ・「気になる1枚」(研修中に撮影したもの)
- ・パワーポイント資料(『Welcome to ZAMBIA』、『ZAMBIAにおける国際協力』、『ZAMBIAと10円玉』)
- ・相互依存神経衰弱
 

『相互依存神経衰弱』の「カード10」「カード20」より、食品やゲーム機などの親しみやすいもの、アフリカ州に関連するものを抜粋して使用した。
- ・インタビュー動画(ザンビア撮影班・収録)
 

JICA 職員、ザンビア大学関係者、北海道大学人畜共通感染症プロジェクト関係者、学校教員や現地調整員等に、仕事内容、やりがい、中学生へのメッセージなどを語ってもらったものを再生。
- ・外務省作成動画『ピコ太郎×外務省 SDGs～Public Private Action for Partnership～』

(4) 参考資料等(日付は授業実施前の最終閲覧日)

- ・『国際協力機構年次報告書』(JICA ホームページより)2017/10/01
- ・『JICA プロファイル』、『JICA の仕事』(JICA 作成冊子)
- ・『JICA ナレッジサイト』([http://gwweb.jica.go.jp/KM/KM\\_Frame.nsf/NavIndex?OpenNavigator](http://gwweb.jica.go.jp/KM/KM_Frame.nsf/NavIndex?OpenNavigator))2017/10/01
- ・(動画)『依存大国日本』(JICA ホームページより)2017/10/01
- ・経済産業省ホームページ(レアメタル他資源に関するデータ等)
- ・造幣局ホームページ、広報室問い合わせ(銅の含有量、輸入先、輸入形態に関する質問と回答)
- ・JATAN 熱帯雨林行動ネットワーク(<http://www.jatan.org/>)2017/10/01

**8 単元を通じた児童生徒の反応/変化**

- ・「SDGs×すぎなみ」、「SDGs×ザンビア」と、SDGsをツールとして学習する活動を通して、杉並区やザンビアのことをより深く知るだけでなく、主に次のような成果(生徒の気づき)が得られた。
  - ①杉並区(日本)にも課題点があることへの気づき。
  - ②課題は一国内に限ったことではなく、様々な国や地域が関連していること。
  - ③発展途上国の現状を先進国が作り上げていること(モノカルチャー経済への加担、環境破壊等)
  - ④似たような課題でも捉え方が様々であること。(同じ「待機児童」問題でも異なるSDGsを選ぶ等)
  - ⑤ ④に伴って、解決方法の手段も多様でありうること。
  - ⑥自分たちにも課題解決のために行動できることがあること。
- ・以下に、「一枚ポートフォリオ」にみる、生徒の感想の変化や学習の深化を一部紹介する。
  - ①【第1回】学習前「国際協力はなぜ必要なの？」
  - ②「SDGs×ザンビア～私の視点～」、「ザンビアにおける国際協力」学習後
  - ③「10円玉とザンビア」学習後(杉並区(日本)との共通点・違い、国際協力について考えたこと)

**【生徒A: 学習前…国内の問題が先決である】**

- ①確かに他の国を支援する前に、自分の国の問題(借金の問題など)を解決してから支援したほうがいいかもね。日本にも困っている人はたくさんいるし。
- ②教育の環境が整っていなかったり、町や病院、工場などの衛生状態が悪くなかったり、途上国はさまざまな問題を抱えているので、いろいろな国どうしが支え助け合っていく必要があると感じた。でも日本は今支援をしている側だけど、まだ解決していない問題がたくさんあって、そんなに余裕があるとも思えないので、支援するかしないかは難しい問題だなと思う。
- ③違いは、杉並区(日本)は教育の環境が整っているが、ザンビアはノートや鉛筆を持っていない子や、壁や机、椅子のない学校が少なくない。共通点は、モノをつくる時の原料を、かなり輸入品に頼っていることと。
- 日本が支援できる側かという、そうだとはっきり言うことはできないし、日本も輸入品に頼っていたり、他にもさまざまな問題があったりするよね。でもいろんな国どうしが助け合っていく必要があると思う。

**【生徒B: 学習前…国際協力は必要である、貿易相手の観点→「国境を越えた問題」という気づき】**

- ①まあ、それもそうだね。確かに多額の金額で支援するといっても、その発展途上国が回復するわけでもない。しかしただ物資を送るだけでなく、人を派遣することで知恵を授け自立できるようになれば、友好的な貿易相手になるかもしれない。多くの途上国があるこの地球で、持続可能な未来を目指すならば、助け合いは不可欠じゃない?
- ②お金や物資を与え続けても、その国はどんどん貪欲になるだけで、「自立」に遠ざかっていくばかりだと思う。本物の「国際協力」は人やそれらに備わった技術が、彼らに必要なのだと思う。そして先進国にはこれらの格差をさらに広げてはならないと思う。自分の

利益を求めただけでは、持続的な未来は存在できないはず。

③あなたもこの地球の中の限りある資源で暮らしていて、上手にやりくりしていかなければならない。それは輸出入の面も踏まえて、独りよがりになってはならないはず。あくまで、その国が自立できるようなお手伝いこそが「国際協力」。日本にもたくさん問題があるけれど、資源ありきでやっているから、ある一定のレベルにすべての国がならないと、格差は広がるばかりだし、国境を越えた問題だから。優先すべき。

【生徒 C : 学習前、国際協力は必要である→「支援」の在り方の多様性や問題点などへの気づき】

①たしかに日本はお金の問題が大変で余裕がないよね。私もテレビでよく日本は世界の中でとても借金がある国だと聞くよ。でもいざとなったときには日本国民のお金で解決できるんだよ。発展途上国に支援して良いこともあるしやって悪いことはないよ。

②①で書いた支援後の「いいこと」とは「お金を返してもらうこと」と思っていた。しかしそれだけでなく、開発・研究する時に日本でまだわかっていないことを発見して使用することができる等、日本にも経済面以外のメリットがあることが分かった。支援するとき大事なものは「ずっと続く」支援をすることである。そもそも協力はその国が自立するためにやるものなのだから、ただ「金をばらまくだけの支援」はだめなのだ。

9 授業実践全体の成果と課題及び課題の改善策

【本単元を実施するにあたって】2学年社会科では歴史的分野と日本地理を取り扱うが、海外研修での学びを社会科分野においてどう意義付けを行い、どの場面で取り扱うかで苦労した。しかし中教審の答申や学習指導要領においても見られるように、地域や地球規模の諸課題について、生徒一人一人が自らの課題として考え、持続可能な社会づくりにつなげていく力をはぐくんでいくことが重要であると考えられたため、SDGsを学習ツールとして、地域学習の単元の中で取り扱うことにした。

【成果】SDGsを学習のツールとすることで、身近な地域をより深く知り、ザンビアの概要を知ると同時に、「発展(開発)途上国/先進国」という二項対立的な捉え方を脱し、諸問題を様々な関係性の中で捉えることができるようになった生徒が多かった。課題解決方法も多様な観点やあらゆる主体を想定したアプローチ方法を考え、提案することができた。また、ジグソー法、一枚ポートフォリオなどの手法を活用することで、生徒自身が自分の考えの深化・変化に気づくことができた。夏季休業中の課題については、インタビューや現地取材を条件としていたが、その中で調査方法の基礎的な力や資料の活用方法を学習することができた。

【課題と改善策】より学習を深めるために、個人で考える時間、集団で考える時間、考えを発表する時間などを確保するべきであった。授業のねらい、資料の精選が必要である。また、教員に対するSDGsの周知、他教科との連携が重要であることも実感した。改善策として、現在は学校司書との連携を図り、図書資料の充実や掲示物の工夫、他行の学校司書との情報交換などを行っている。また他教科の教員へのSDGsの紹介や、教材・情報の共有などを行っていく予定である。

10 教師海外研修に参加して

主に、①国際協力に対する考え方の変化、②初等教育の重要性を実感・理解したこと、③「落とし込む、決めつける」のではなく、見聞したことをもとに課題を考え続けることの重要性、④偏見や先入観をできるだけ取り除くこと、の4つを学んだ。ここでは①について述べておきたい。

派遣前は国際協力の必要性や意義について、生徒に対する自分自身の説明内容・方法に違和感を持っていた。私自身が中学・高校時代に受けた教育としては、主に公的的分野において、「日本は先進国として、経済的に裕福なため、発展途上国に援助する義務がある。日本のODAの現状としては金額的には他国と比較して高額だが、今後は技術支援が課題である。」というものであった。

しかしSDGsをツールとして物事を捉えてみると、国際協力は先進国が「責任」や「支援」として一方的に行うものではなく、「この地球に、共に生き続けるために」国や地域を超えて様々な観点から同時に取り組むべき課題であるという考えに変わっていった。

また、海外研修について活動を間近で見ることで国際協力について具体的にイメージできるようになったことは大きな成果であり、ザンビアにおける課題や解決の過程を見る中で日本における同様の課題についても考えさせられたり、北海道大学とザンビア大学の共同研究によるエボラ出血熱の検査キットの開発など、互いにとって「利益」がある活動の具体例を見聞したりすることもできた。

JICA ザンビア事務所・花井所長の言葉をお借りすると、「みんな、同じ池の中の金魚なんだよ」ということになるが、この言葉をヒントに、今後も自分なりに考え、授業での実践や自分の行動に生かしていきたい。